

甲虫ニュース

COLEOPTERISTS' NEWS

Nos. 23, 24

(Dec. 1974)

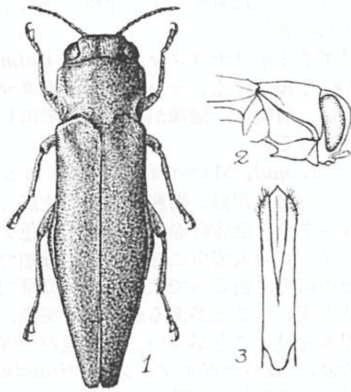
日本産タマムシ科概説 (12)

黒沢良彦

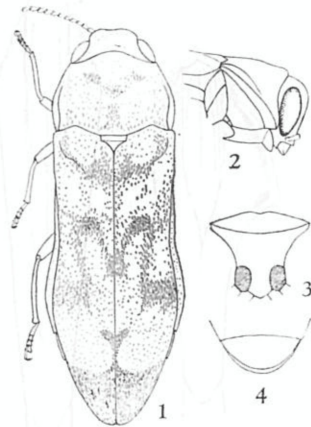
24. *A. kowarai* Y. KUROSAWA, 1963 ホソクロナガタマムシ 分布: 日本(本州, 四国)。体長7~9mm。黒色でやや唐金色を帯びる。時に前胸背は緑や赤味を帯びることがあり, 体下は唐金色。雄の顔面は緑色。各翅鞘には銀灰色短毛からなる2紋を中央直前と翅端近くの会合部に装うが, いずれも鮮明さを欠き, 特に中央紋は欠くこともある。体は細長, 内側隆線は短く弯曲, 下側隆線は後方 $\frac{1}{2}$ の所で側隆線に合する。静岡県聖岳山麓で河原 誠氏が採った♂♂, 三重県平倉で市橋 甫氏が採った2♀♀。

州にも産すると思うがまだ標本に接したことがない。

25. *A. komarecki* OBENBERGER, 1925 クワナガタマムシ 分布: 日本(北海道, 本州, 四国, 九州)。体長4~6mm。全体唐金色で時に多少銅色や緑色を帯びる。原産地は東京中野。4~7月に現れ, クワにつく。東北地方でハルニレに発見される種類も本種と区別するだけの特徴がなく, 同種と見做しておく。北海道産は明るく内側隆線が不明瞭な点で本州産と区別される。私は記載だけによって, 北海道札幌から記載された *A. sapporoensis*



第11図 クワナガタマムシ
1. 背面 2. 頭胸部側面
3. 雄交尾器



第12図 クルミナガタマムシ
1. 背面 2. 頭胸部側面
3. 前胸腹板 4. 腹部末節腹面

兵庫県養父郡大屋町西谷で故花野満男氏が採った1♂, および愛媛県河原で矢野俊郎氏が採った1♀♀によって記載した。夏に現れるが, 加害植物は未知。上記のほか, 奈良県吉野郡天川村稲村ヶ岳産1♂ (21. vii. 1956, 横山 創採集) 同県吉野郡十津川村伯母子岳産1♂1♀♀ (9. viii. 1974, N. Okuda採集) と高知県香美郡物部村産1♀♀ (26~28. viii. 1958, 森本 桂採集) を検しただけである。恐らく九

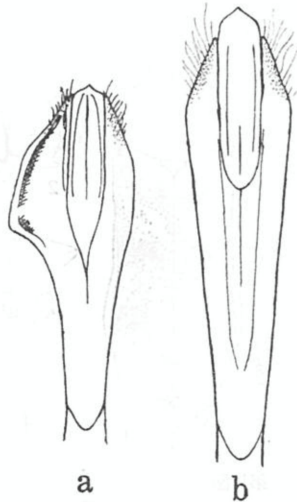
OBENBERGER, 1925 をこれに当るものと考え, 本種の北海道産亜種名に当てたが, プラーク博物館に所蔵される完模式標本は後述する *A. rotundicollis* E. SAUNDERS, 1873 アサギナガタマムシの♀♀に他ならない。従って北海道産の亜種名は未定である。

26. *A. kurumi* Y. KUROSAWA, 1957 クルミナガタマムシ 分布: 日本(本州)。体長4.5mm内外。

前胸背は前方に狭まり、一見ナカボソタマムシ族のもののような感じがするが、後肢附節第1節が長く、明らかにナガタマムシ属の種類であることが判る。この仲間は東アジアに限って産し、ヒラシマナガタマムシ *A. hirashimai* Y. KUROSAWA や後述するクモガタナガタマムシ *A. malloti* Y. KUROSAWA もこの仲間である。現在までに知られている産地は東北地方から中部地方にかけての地方で、それ程多い種類ではない。加害植物はオニグルミ。他のクルミ類の加害例を私は知らない。

27. *A. lasiolus* OBENBERGER, 1935 ヒメクロナガタマムシ 分布：日本(対馬), 朝鮮, ウスリー。体長 4.5mm 内外。黒色, かすかに唐金色を帯び、翅鞘背面は一面に銀灰色短毛に覆われる。雄交尾器は、本誌17/18号のオオシマナガタマムシの項で記した様に、左右が著しい対称になっていて、左方に奇妙な形に張り出している。左右対称の雄交尾器を持つ種類はヨーロッパから中央アジアにかけて分布する *A. angustulus* (ILLIGER, 1803) に代表される *angustulus* 群に属し、欧亜大陸にかなりの種類が知られているが、日本では対馬の本種と奄美大島のオオシマナガタマムシだけで、本土からは全く知られていない。加害植物はナラ、クスギ類で、対馬では6月頃の発生期には稀ではない。

本種はウスリーから記載された *A. ussuricola* OBENBERGER, 1924 の変種として記載されたもので



第13図 雄交尾器

a. ヒメクロナガタマムシ
b. スジバナナガタマムシ

あるが、*ussuricola* とは異った独立種である。

28. *A. lewisi* KERREMANS, 1903 ルイスナガタマムシ 分布：日本(北海道, 本州), 樺太。体長 6~9mm。体色に変化が多く、唐金色, 銅色, 赤色, 緑色, 青色などいろいろあるが、基本型は銅赤色のものである。前胸背の形の相異によって4亜種に分けられるが、樺太産は未命名、北海道と東北地方中北

部のものは側縁の波曲が弱く、十和田から独立種として記載された、青色の *A. touadensis* MIWA & CHÛJÔ, 1940 がこれに当る。この亜種には銅赤色の型が現れる率が少ない。東北地方南部から中部地方の山地にかけてのものは側縁の波曲が強く、日光から記載された *A. brevitarsis* LEWIS, 1892 に当るが、この種名は先占されているので、KERREMANS が改名した *lewisi* KERREMANS, 1903 を用いなければならない。近畿以西のものは前胸背の幅が狭く、側縁の膨出の弱い点で他と異なるが未命名である。加害植物は未知であるが、私は山形県吾妻山中の白布高湯と滑川で共にトネリコ類の花から得たことがある。

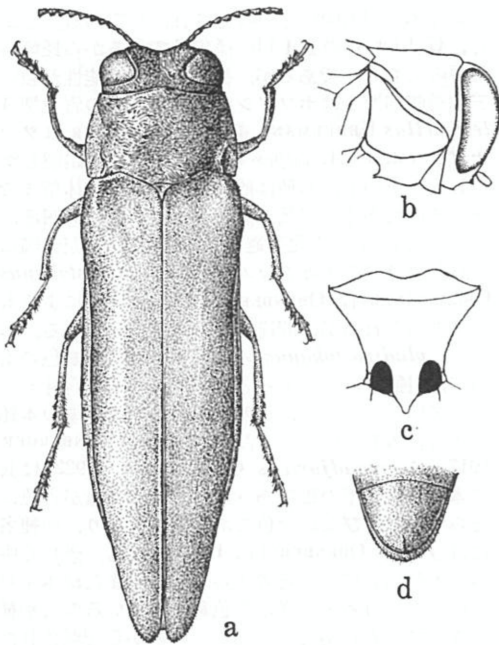
本種は後述するヤナギナガタマムシ *A. swarovii* OBENBERGER, 1935 に酷似しているが、頭楯の幅が狭い点で区別される。本種、ヤナギナガタマムシおよびヨーロッパに広く分布し、本属の模式種になっている *A. viridis* (LINNÉ, 1758) はどれも雄交尾器の形が酷似していて判別するのに困難する。また色彩の変化も似通っているし加害植物もヤナギ類やトネリコ類である点も同様である。恐らく同一の種類を構成するものであるよう。

29. *A. maculifer* E. SAUNDERS, 1873 カクムネナガタマムシ 分布：日本(九州)。体長 5mm 内外。前胸背は銅赤色、翅鞘には白毛と金毛とからなる毛斑がある。原産地は単に Japan とあるだけである。しかし、G. LEWIS の第1回の採集品であるから、長崎か兵庫のどちらかであるが、多分前者であろう。私は長崎産の1♀を検しただけである。加害植物は未知。

一見ダイミョウナガタマムシ *A. daimio* OBENBERGER や後述するシャシャンボナガタマムシに似ているが、前胸背の側縁がほとんど膨出しない点で見分けられる。

30. *A. mali* MATSUMURA, 1924 リンゴナガタマムシ 分布：朝鮮, 満洲, 中国(北部), 日本?。体長 5~7mm。全体紅赤色, 多少唐金色を帯びる。朝鮮でリンゴの大害虫になっている種類であるが、日本での産否は明らかではない。長野県で採れると云う話を聞いたことがあるが、私は実際に日本で採れた標本を見たことがない。日本産のナガタマムシの中では、アカバナナガタマムシ *A. sinuatus yokoyamai* IGA が最もよく似ている。あるいは長野に産すると云う話もこの種類を誤ったのかも知れない。

31. *A. malloti* Y. KUROSAWA, 1957 クモガタナガタマムシ 分布：日本(四国, 九州, 屋久島), 琉球(奄美大島)。体長 4mm 内外。クルミナガタマムシ *A. kurumi* Y. KUROSAWA によく似ているが、体の背面の隆起は強く、体の毛斑はより密で鮮明、褐色毛を混じることが多く、複眼の傾きが強く、腹部末節端は葉状になるなどの点で異なる。加害植物はアカメガシワ。屋久島の尾の間と安房で採集した7♂♂6♀♀で記載したが、そのほかに高知県足摺岬、鹿児島県佐多岬、奄美大島新村などの標本を検している。



第14図 アオナガタマムシ原亜種(朝鮮産)
a 背面, b 頭胸部側面, c 前胸腹板,
d 腹部末節腹面

32. *A. marcopoli* OBENBERGER, 1930 アオナガタマムシ 分布: 日本(北海道, 本州, 九州), 朝鮮, 満洲, モンゴル, 台湾。体長10~14mm。一面美しい緑色, 時に唐金色や銅色を呈することがある。原産地はモンゴル, 私は朝鮮から記録し, 日本産は大産のものに比べ, 内側隆線が不明瞭であるなどの点で別亜種 *ulmi* Y. KUROSAWA, 1956 として区別した。これは, 長谷川仁氏が北海道札幌で採集した1♂6♀♀などに基づいたもので, 本州や北九州でも採集されているがいずれも少ない。加害植物はハルニレと云うが, トネリコ類かクルミ類である可能性もある。チェコスロヴァキアのプラハ国立博物館に *A. teretris* OBENBERGER の模式標本とされている台湾産の標本は正しく本種の亜種に当ると思われるもので, 美しい青緑色をした♀であったが, この種類がどこに発表されたか私にははっきりさせることが出来なかった。

33. *A. marginicollis* E. SAUNDERS, 1873 ブドウナガタマムシ 分布: 日本(北海道, 本州, 四国, 九州)。体長4.5~6.5mm。頭と前胸背は鋼鉄様の光沢のある黒色, 翅鞘は唐金色, 黒色を帯び, 肩部から翅端に向う銀灰色の条斑がある。♂の顔面は緑色を帯びる。前胸背の中央には縦溝があり両側はほぼ平行。腹部末節端は2葉片状。加害植物はヤマブドウや栽培ブドウの幹枝。ヨーロッパに広く分布し, やはりブドウの害虫の *A. derasofasciatus* LACORDAIRE & BOISDUVAL, 1835 によく似ているが, 雄の交尾器が異なる。

34. *A. mendax* MANNELHEIM, 1837 カラフトナガタマムシ 分布: 樺太, ヨーロッパ。体長10mm内外。銅赤色, 一見アカバナガタマムシ *A. sinuatus* (OLIVIER, 1790) に似るが, 内側隆線の形が異なり, 翅端が外側に開き, 前胸腹板突起の形が異なるなどの点で区別される。樺太から記載された *A. sachalinensis* OBENBERGER, 1935 は間違いなく本種と同一種で, せいぜい亜種くらいの相違しかない。ヨーロッパでは中北部および東部に産し, 余り多い種類ではない。中央アジアからシベリアにかけて全く記録がないが, 恐らく東欧と樺太の間を埋める分布地があるであろう。日本にも産するかも知れないが, 今の所記録がない。ヨーロッパでの加害植物はナナカマド類。

35. *A. moerens* E. SAUNDERS, 1873 ツヤケシナガタマムシ 分布: 日本(本州, 四国, 九州, 対馬)。体長5~7mm。全体光沢のない黒色, 雄の顔面は緑を帯びる。雌には時に翅鞘の後方1/3の所の会合部に黄色毛からなる点紋を現わすものがある。模式標本には単に Japan とあるのみで, 詳しい産地は判らないが, G. LEWIS の第1回の採集品であるから, 長崎付近か神戸付近のどちらかである。加害植物は柿の枝幹の樹皮下である。

私が以前本種の種名に用いていた *A. nipponigena* OBENBERGER, 1935 は両種の模式標本を調べた結果, 同一種に過ぎないことが明らかになった。従って和名は *moerens* に与えられていたキンボンシナガタマムシを用うべきかも知れないが, 本種の状態にはツヤケシナガタマムシの方が適当と思い, それを用いた。もっとも, *nipponigena* (三輪, 中条両氏の目録には *nipponigera* になっている) にはニホンナガタマムシと云う和名があったが, 日本人が日本の昆虫にニホンの名をわざわざ冠する必要はないと云う私の主張で北隆館の原色昆虫大図鑑Ⅱで改称したものである。

36. *A. nakanei* Y. KUROSAWA, 1963 ナカネナガタマムシ 分布: 日本(本州, 九州)。体長4~7mm。頭胸部は黒色, 鋼鉄様光沢がある。翅鞘は緑を帯びた唐金色または真鍮色, 後方2/5は黒色でその後方翅端近くの会合部に銀白色短毛からなる毛斑がある。生時には黒色部の前縁に接する部分が帯状に明るく光り目立つが, 標本にすると消失し目立たなくなる。最近東京近郊に数が増え, 5月下旬から6月上旬にかけて大発生することがあり, 加害植物を探していたが, 久しく判らずにいた。しかし, 本年野淵 輝氏や石塚秀樹氏のお蔭で, 意外にもマサキに加害することが判明した。最近排気ガス其他で東京近郊のマサキの生垣は衰弱する傾向にありそこに本種が加害しはじめたものと考えられる。従って, 本種の大発生は公害の増加によって惹起されたと見做して差支えないであろう。

本種は台湾と対馬に産するツシマナガタマムシ *A. acastus* KERREMANS の亜種として記載したものであるが, 日本産は内側隆線の弯曲が弱いので別

種として扱った方が妥当と考える。

37. *A. okinawensis* MIWA, 1933 オキナワナガタマムシ 分布：琉球（沖縄本島、石垣島、西表島）、台湾（紅頭嶼）。体長5~8mm。頭胸部は赤色、雄の顔面だけ緑色、翅鞘は黒色、一面銀灰色短毛でおおわれ、肩部陥凹中、中央直前、後方 $\frac{1}{2}$ の会合部の3個の銀白色毛からなる白紋があるが、個体変化が多く白紋を全く欠くものまである。加害植物ははっきりしないが、リュウキュウエノキかも知れない。三輪勇四郎博士により西表島から記載されたが、私の手許には石垣島と沖縄本島産の標本がある。また1957年に故鹿野忠雄博士採集の1♂1♀に基づいて紅頭嶼から記録した。この様に紅頭嶼と八重山に分布する種類は大抵フィリピンにも分布するので、同国から記載された種類を調べたが該当する種類は見当らなかった。しかし、ボルネオから記載された *A. sandakanus* OBENBERGER, 1924 とキー諸島 (Key Is.) から記載された *A. xenius* OBENBERGER, 1924 は共に本種に近い種類である様に思える。

38. *A. pilosovittatus* E. SAUNDERS, 1873 シラケナガタマムシ 分布：日本（本州、四国、九州、対馬）。体長3.5~5.5mm。唐金色、緑または赤味を帯びることがある。内側隆線は長く、波曲し、前縁角近くに達する。翅鞘は金白色短毛の縦帯を肩部から翅端にかけて走らすが、両側と会合部は無毛、白帯も見方によっては全く見えない。5~7月に現れ、藤の枝幹に加害する。北アメリカに輸入された藤で発見され問題になったことがある。産地は単に Japan と記されているだけであるが、G. LEWIS の第1回の採集品であるので長崎か神戸のどちらかであるが、後者である可能性が高い。ゼマンナガタマムシ *A. zemani* OBENBERGER, 1925 およびヒコサンナガタマムシ *A. yamabusi* MIWA & CHÛJÛ, 1940 は共に本種のシノニムである。両種共に模式標本を検査することが出来た。

39. *A. ronino* OBENBERGER, 1935 ロニノナガタマムシ 分布：日本（本州、四国、九州）。体長5mm内外。光沢のある唐金色、緑色やオリーブ色を帯びることも多く、前胸背側縁部は金色を呈することが多い。触角は節間がつまり、前胸背の側縁は後方で波曲し、翅鞘は後方に長くのびる様に狭まる。5、6月頃に現れるがそれ程多い種類ではない。模式標本は黒味がかかった標本で熊本県人吉産。加害植物は未知。

40. *A. rotundicollis* E. SAUNDERS, 1873 アサギナガタマムシ 分布：日本（北海道、本州、四国、九州、対馬）、朝鮮、満洲、シベリア東部。体長4~6mm、雌雄色彩が異なり、雄は緑青色か緑を帯びた唐金色、雌は空色か暗青色、紺色を帯びることもある。下側隆線と側隆線は合することはない。加害植物はナラ、クヌギ類。4~7月に出現し、加害植物の葉上に見られるがそれ程多い種類ではない。

模式標本は Japan とのみ記された♀である。しかし、G. LEWIS の第1回の採集品であるから長崎か神戸のどちらかであるが、後者である可能性が高い。三輪勇四郎博士はホソアシナガタマムシの青色型 *A. lewisiellus* KERREMANS を、J. OBENBERGER はツヤナガタマムシ *A. cupes* LEWIS を本種と誤認したらしい。その上に本種は雌雄色彩が異なり体型まで異なるので多くの混乱が惹起された。三輪勇四郎、中条道夫両博士が北海道と東京角筈から記録図示されたウラジオナガタマムシ *A. vladivostokanus* OBENBERGER は OBENBERGER 自身の同定によるものと推定されるが、間違いなく本種の雌である。しかし、*vladivostokanus* の模式標本は暗銅緑色のもので、本種ではない。もっとも OBENBERGER 自身も混乱していたと見えて、この同定の許に大陸型の本種の雌も混入していた。また *A. fissus* OBENBERGER, 1917, *A. mandjuricus* OBENBERGER, 1922 は共に本種の大陸型の雌であった。大陸産は雌が青色にならず緑を帯びた唐金色である点で異なり、亜種名には *fissus* OBENBERGER, 1917 が残る。恐らく中国にも分布していると考えられるが、まだ標本を見ていない。日本とは異なる色彩をしているので別種になっているのかも知れない。札幌から記載された *A. sapporoensis* OBENBERGER, 1935 も本種の雌であった。

41. *A. sachalinicola* OBENBERGER, 1940 スジバナガタマムシ 分布：樺太、日本（北海道、本州）。体長9~11mm。頭胸部は赤色、雄の顔面だけ緑色、翅鞘は黒色、時にかすかに青または緑を帯びることがある。体下は鋼鉄様光沢のある黒青色。ケヤキナガタマムシ *A. spinipennis* LEWIS によく似ていて混同され易いが、頑強で、前胸背の側縁が膨出し、翅鞘中央にかすかな縦隆脈を走らせ、翅端の突出が弱く、尾節板の先端が突出するなどの点で異なる。日本では北海道洞爺湖畔、十和田、日光、上高地などの産地が知られているが稀である。加害植物は未知であるが、ケヤキナガタマムシの加害植物やその分布から推定して、恐らくはハルニレであろう。

42. *A. shashamboe* Y. KUROSAWA, 1963 シャシャンボナガタマムシ 分布：日本（本州、四国、九州）。体長4.5~7mm、全体にぶい銅色、頭胸部は赤味を帯び、雄の顔面は真鍮色を帯びる。内側隆線は長く、波曲し、前縁角に達する。翅鞘は一面に灰色の短毛でおおわれ、その中に肩部、中央、後方 $\frac{1}{2}$ の会合部に各一個の不明瞭な銀灰色短毛からなる斑紋がある。加害植物はシャシャンボであると云うが、多少疑問がある。四国、九州などではそれ程稀な種類ではない。本州では静岡県気多、滋賀県比良山、奈良県大台原山などで採れている。

(国立科学博物館)

日本産 *Pidonia* 属の覚え書 (4)

鳥々谷の *Pidonia* 属の記録

窪木幹夫

古くから上高地への登山路として知られている鳥々谷は、長野県南安曇郡安曇村鳥々 (725m) から始まり、二俣で南谷と北谷に分岐し、南谷は岩魚止小屋を経て徳本峠へ至っている。鳥々・二俣間はコナラ・クリ林に代表される落葉広葉樹林で、一部は人工林となっている。岩魚止小屋付近は針広混合林で、落葉広葉樹林は岩魚止小屋の上、標高1400m付近まで広がり、それより上部ではコマツガ、トウヒ、クロベ、サワラ等の針葉樹林が発達し、徳本峠付近はダケカンバ、シラビソ、ナナカマド等の灌木帯となっている。地質的に常念山系は常念岳を境に北部は火成岩、南部は古生層から成っており、鳥々谷は南部の南東斜面に位置している。

今回の採集は南谷の二俣・徳本峠の間で行なわれ、期間中の天候は雨時々曇であった。なお各種 *Pidonia* はノリウツギ、シシウド、シモツケ、タマアジサイ、ショウマ類の花上から採集された。

調査年月日：1973年7月30日～8月1日。

調査コース：二俣 (889m) 二岩魚止小屋 (1270m) 二峠沢出合 (1660m) 二徳本峠 (2135m)。

なお、採集は筆者自身によるものである。

1. *P. puziloi* (SOLSKY) フタオビノミハナカミキリ, 2♀ (1300—1400m)。
2. *P. testacea* (MATSUSHITA) ニセフタオビノミハナカミキリ, 175♂♂, 62♀♀ (1400—2135m)。

前種とは、上翅の剛毛の形態と密度が異なる点で区別される。すなわち、本種の剛毛は、前種より短く、高密度 (単位面積当たり1.6~1.7倍) である。前胸の側縁の突起、色彩は不安定な形質で区別点としては使用し難い。生態的にも両種は垂直的な異所性を示し *puziloi* は広葉樹林帯に、*testacea* は針葉樹林帯に生息し、当地ではその境目が標高1400m付近にあった。

3. *P. semiobscura* (PIC) ホソガタヒメハナカミキリ, 45♂♂, 3♀♀ (1250—2050m)。
4. *P. matsushitai* OHBAYASHI ヘリモンヒメハナカミキリ, 37♂♂, 2♀♀ (1270—2135m)。
5. *P. ohbayashii* (MATSUSHITA) オオバヤシヒメハナカミキリ, 42♂♂, 6♀♀ (1270—1850m)。
6. *P. mutata* (BATES) ヒメハナカミキリ, 10♂♂, 8♀♀ (1300—2135m)。

採集された個体には、斑紋、色彩、形態の連続的な変異があり原亜種の他、南アルプス、奥日光、八ヶ岳の高山帯に分布する ssp. *pallida* OHBAYASHI et HAYASHI が4♂♂, 3♀♀含まれていた。最も退色した個体は、上翅側縁の前方と中央の斑紋 (latero-basal marking, latero-median marking)

を欠いていた。これらの事から、両亜種は今後検討する必要がある。

7. *P. sp.*, 23♂♂, 9♀♀ (1480—2135m)。

本種は、*mutata* や *maculithorax* に似ているが、上翅の斑紋、交尾器、前胸の形態・色彩等で区別される。筆者は、現在北アルプスの他、南アルプス、日光山塊から採集した標本を比較検討中である。

8. *P. maculithorax* PIC カクムネヒメハナカミキリ, 251♂♂, 81♀♀ (1270—2135m)。

本種は紀伊半島の高地帯、中部山岳、関東、東北地方から知られているが地方によって斑紋の変異が著しい。今回採集された♂の多くは、f. *tohokensis* で上翅の小楯板を囲む斑紋 (basal band) と翅端の斑紋 (apical band) を完全に欠き、latero-median marking と latero-posterior marking も大部分のものが消失して、体型は細長く淡黄褐色であった。♀は f. *orientalis* で上翅の apical band を欠くが、側縁の三つの斑紋は細長く連絡し、肩の斑紋 (humeral marking) や basal band とも連続している。又 apical band があり、前胸の両側縁が黒化した f. *bouvieri* が1♀ (1700m) 含まれていた。

9. *P. muneaka tamanukii* HAYASHI, 1♂ (1500m)。

10. *P. grallatrix* (BATES) オオヒメハナカミキリ, 79♂♂, 30♀♀ (1250—2050m)。

11. *P. signata* MATSUSHITA フイリヒメハナカミキリ, 3♂♂, 1♀ (1850—2135m)。

本種は他に比べて最も高い垂直分布を示した。

12. *P. insuturata* (PIC) ヨコモシヒメハナカミキリ, 293♂♂, 126♀♀ (1000—2135m)。

13. *P. masakii* (TAMANUKI) ムネアカヨコモシヒメハナカミキリ, 22♂♂, 16♀♀ (1150—1800m)。

14. *P. oyamae* (OYAMA) オヤマヒメハナカミキリ, 41♂♂, 4♀♀ (1350—2000m)。

♀は腹板が赤褐色で上翅基部から会合線に沿った縦紋は褐色で、黄白色の二紋と連続する *ab. iwanadomensis* であった。

15. *P. debilis* (KRAATZ) チャイロヒメハナカミキリ, 217♂♂, 79♀♀ (950—2135m)。

本種は最も厚い垂直分布を示した。

北アルプスは南部と北部とで若干 *Pidonia* 相が異なる。特に、*semiobscura* は北部では近縁の *P. obscurior hakusana* OHBAYASHI et HAYASHI が分布するようになる。*ohbayashii* は北部では非常に少なく、一方北部に分布する *P. miwai* (MATSUSHITA) は今回採集されなかった。このような問題を解決するために、今後は北部ならびに中部地域の調査も必要である。

なお、採集された総個体数は1668頭、♂は78%、♀は26%であった。*insuturata* (25%)、*maculithorax* (20%)、*debilis* (18%)、*testacea* (14%) の4種が優占種であった。(東京農大)

コクロマルクビハネカクシとその近似種

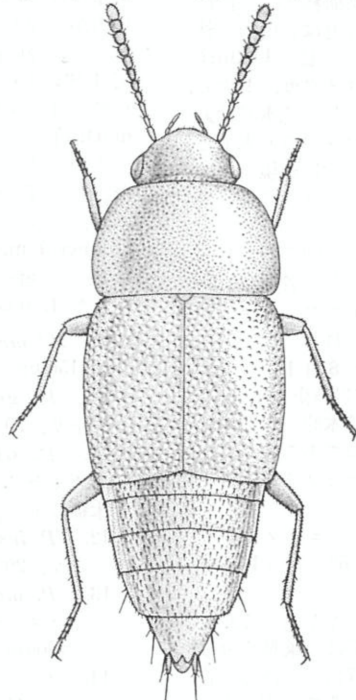
渡 辺 泰 明

コクロマルクビハネカクシは G. LEWIS によって箱根の木賀および仙台から採集された個体に基づき、1888年、D. SHARP によって *Tachinus diminutus* と命名記載された種である。(Ann. Mag. Nat. Hist. (6) II : 385)。その後、沢田高平博士 (1956) は京都北山峡から採集された本種の全形を図示し、チビマルクビハネカクシなる和名を提唱された (Nature Study, 2 (12) : 6)。しかし中根猛彦博士 (1963) は本種を原色昆虫大図鑑 II (甲虫篇) に収録した際に、コクロマルクビハネカクシと和名を改称され、その分布地として本州をあげた。また佐藤光子女史 (1968) は岩手県産ハネカクシ類のリストを編纂した中で、本種の産地として同県山田町不動山を記録し (岩手県産鞘翅目仮目録 (1) : 22)、さらに柴田泰利氏 (1974) は屋久島宮ノ浦を本種の産地として報告している (本誌, (19/20) : 5)。以上が筆者の知り得たコクロマルクビハネカクシに関する記録であるが、それらによれば現在まで

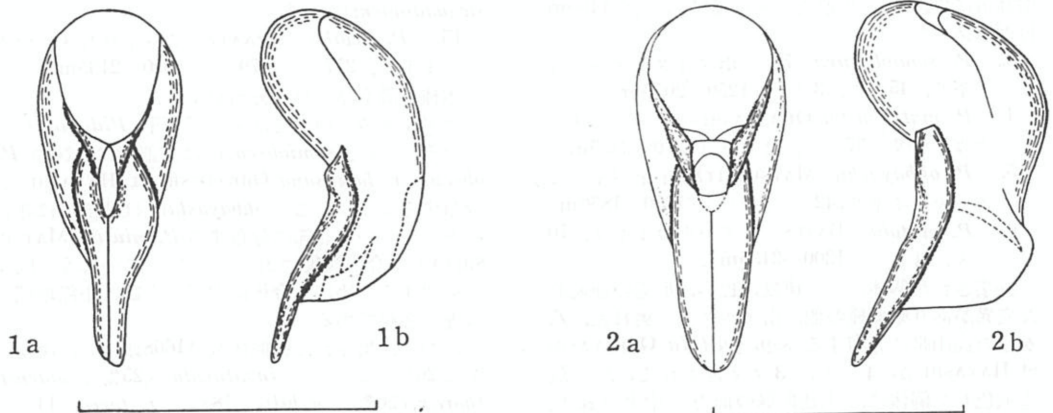
に判明している本種の記録産地は岩手県山田町、仙台、箱根、北山峡、屋久島の5ヶ所ということになる。

本種は通常、堆積した朽ちた落葉中に生息し、体長は3mm内外で日本産 *Tachinus* 属の中では最も小型であり、体色は前背板の周縁部を除いてはほぼ一様に褐色を呈しているのみで、特に際立った特徴のある種ではない。従って、従来から採集者の眼にとまる機会が少ないことや、採集意欲をそそる形態的条件にとぼしいこと等が、上述の如く本種に関する記録が極端に少ない原因の一つになっていると考えることができる。しかし堆積した朽ちた落葉中を注意深く探索すれば、本種を見出すことは比較的容易で、同好者の今後の活動によっては各地から多くの採集記録を期待することができる。

一方、*Tachinus kobensis* は M. CAMERON (1933) によって、神戸：摩耶山を模式産地として記載された種であるが、(Ent. monthly Mag.,



第1図 *Tachinus diminutus* SHARP コクロマルクビハネカクシ (大菩薩峠産, scale=1.0mm)

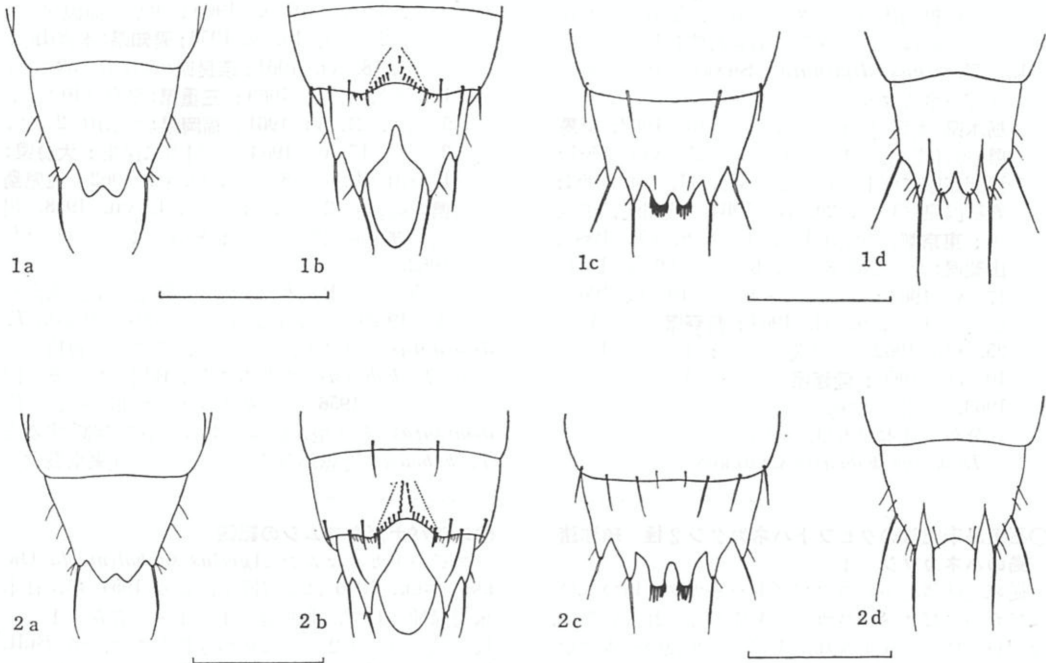


第2図 コクロマルクビハネカクシ種群の♂交尾器 (scale=0.5mm)。

1. *Tachinus diminutus* SHARP, 2. *T. kobensis* CAMERON : a 腹面, b 側面。

(69): 172). 同種の体型および色彩は上述のコクロマルクビハネカクシと極めて良く似ている。加えて同種の生息場所もコクロマルクビハネカクシのそれと全く同様のため、これら両種が混同されている危険性があり、*T. kobensis* の採集記録が CAMERON の原記載以後全くない事実は、これの裏付けと考え

られなくもない。そこで筆者はこの様な混乱を避ける意味で、これら両種の識別点を提示し、同好者各位の関心を喚起することにした。本小文がその様な意味で、多少なりとも役立つことができれば幸甚である。



第3図 コクロマルクビハネカクシ種群の後方腹節 (scale = 0.5mm)

1. *Tachinus diminutus* SHARP, 2. *T. kobensis* CAMERON: a ♂ 背板, b ♂ 腹板, c ♀ 腹板, d ♀ 背板。

	<i>T. diminutus</i> SHARP	<i>T. kobensis</i> CAMERON
体長	3mm内外。	4.5mm内外。
頭部	全面平滑で皮革様構造は認められない。	頭および複眼の内側は明らかに皮革様構造が認められる。
前背板	点刻は頭部のものより強く、より明瞭である。周縁部表面には皮革様構造は認められない。	点刻は頭部のものとはほぼ同様で極めて細かい。周縁部表面には弱い皮革様構造が認められる。
翅鞘	強く点刻され、点刻間には皮革様構造はない。	点刻間には明らかな皮革様構造が認められる。
腹部	♂ 末端節腹板の後縁中央は三角形にえぐられるが中央基部は急に狭まる。第6腹板の中央後方の三角形状陥没の中にある刺毛状感覚突起物は中央において不規則に位置する。第5腹板後縁中央両側には刺毛がない。 ♀ 末端節背板の中央葉片は後縁が三角形状にやや深くえぐられる。末端節腹板中央後縁は三角形状にやや浅くえぐられる。前節後縁には長い2対の刺毛をそなえる。	♂ 末端節腹板の後縁中央はやや幅広い三角形状にえぐられる。第6腹板の中央後方にある三角形状陥没の中にある刺毛状感覚突起物は中央においてほぼ平行した二列状を呈する。第5腹板中央両側には1対の長い刺毛がある。 ♀ 末端節背板の中央葉片は後縁が幅広く浅くえぐられる。末端節腹板中央後縁は楕円形状にやや深くえぐられる。前節後縁には長い3対の刺毛をそなえる。

上述の如く、兩種はともに本州に分布していることは古くから判明していたが、筆者の手許にある標本に関する限りでは *T. kobensis* の方が、コクロマルクビハネカクシよりは、より普通に採集され、しかも分布域も広い様である。以下は筆者が検視することのできた標本であるが、多くの未記録地域からのものが含まれているので、参考のために記録する。

なお、検視個体のデーターの中で、筆者により採集されたものはすべて採集者名を省略した。

1. *Tachinus diminutus* SHARP コクロマルクビハネカクシ
栃木県:奥塩原(4♀♀), 5. viii. 1962; 群馬県:奥日光丸沼(1♂, 4♀♀), 27. viii. 1964; 浅間高原二度上(1♂, 2♀♀), 11. vii. 1962; 霧積温泉(1♂), 20. iv. 1964, 高橋慶二郎採集; 東京都:雲取山(1♂, 1♀), 8. vii. 1966; 山梨県:大菩薩峠(8♂♂, 6♀♀), 20. v. 1961, 17. v. 1964; 増富温泉(1♀), 19. v. 1963; 広河原(1♂), 6. vi. 1964; 長野県:戸台(1♂), 25. vii. 1962, 塚口茂彦採集; 島々谷(1♀), 20. vii. 1966; 愛媛県:面河溪(1♀), 20. iv. 1963, 立川周二採集。

分布:日本(本州, 四国 [新記録])。

2. *Tachinus kobensis* CAMERON

山形県:立川町(1♂, 1♀), 30. vii. 1960; 温海岳(7♂♂), 10. vii. 1960; 埼玉県:大滝村川又(1♀), 21. v. 1972; 東京都:奥多摩古里(1♂, 2♀♀), 5. v. 1960; 高尾山(2♂♂), 26. iv. 1959; 神奈川県:平塚(1♂, 1♀), 14. ix. 1959, 12. viii. 1960, 田中和夫採集; 箱根湖尻(2♂♂, 2♀♀), 24. v. 1966; 箱根浅間山(2♀♀), 23. v. 1966; 静岡県:天城山(5♂♂, 4♀♀), 4. x. 1960; 伊豆大滝温泉(2♂♂, 2♀♀), 15. v. 1966; 愛知県:本宮山(4♀♀), 18. vi. 1961; 奈良県:春日山(30♂♂, 19♀♀), 4. v. 1969; 三重県:平倉(10♂♂, 5♀♀), 21. vi. 1961; 福岡県:英彦山(2♂♂, 2♀♀), 17. iv. 1963, 立川周二採集; 大分県:祖母山(4♂♂, 8♀♀), 13. vi. 1962; 鹿児島県:霧島山(2♂♂, 3♀♀), 1. vii. 1958, 川辺 湛・藤沢勝利採集; 知覧(1♀), 11. vi. 1962。

分布:日本(本州, 九州 [新記録], 屋久島*)。

* 本誌19/20号に柴田泰利氏により屋久島から *T. diminutus* が記録されているが、その後の再検討により *T. kobensis* であることが判明した。また沢田高平博士(1956)が図示された北山峠産 *T. diminutus* も体型が幅広である点から判断すると *T. kobensis* と思われる。(東京農大)

○石垣島未記録のクビトハネカクシ2種(琉球諸島のハネカクシ 1)

従来琉球諸島からのクビトハネカクシ属のものはアカバクビトハネカクシ1種が知られていたが、今回石垣島から採集された未記録の2種の標本を検査することが出来た。従って琉球諸島には下記の3種が分布していることになる。貴重な標本を御恵与下さされた水沢清行および渡辺信敬両氏に厚く御礼申し上げます。

1. *Pinophilus javanus* ERICHSON クロクビトハネカクシ

1頭, 石垣島, x—xi. 1966, 水沢清行採集; 36頭, 石垣市平得, 11. vi. 1973, 渡辺信敬採集。

分布:本州, 九州, 対馬, 石垣島; インド, セイロン, ジャワ, スマトラ, 中国。

2. *Pinophilus punctatissimus* SHARP

1雌, 石垣島, x—xi. 1966, 水沢清行採集, 4雄, 1雌, 石垣市平得, 11. vi. 1973, 渡辺信敬採集。

分布:本州, 九州, 屋久島, 石垣島; 中国。

3. *Pinophilus rufipennis* SHARP アカバクビトハネカクシ

分布:本州, 九州, 屋久島, 宝島, 奄美大島, 徳之島, 与那国島; 中国。

なお、渡辺氏採集の平得での標本はすべて夜間採集の燈火に飛来したものである。

(東京都町田市, 柴田泰利)

○スジバナガタマムシの記録

スジバナガタマムシ *Agrilus sachalinicola* OBENBERGER, 1940 は黒沢博士により1954年に日本未記録種として、北海道産1♂1♀, 青森産1♂, 長野県上高地産2♀♀に基づき報告されたが(Bull. Nat. Sci. Mus., Tokyo, Vol. 1, No. 2, p.92)その後の報告を見ない。

幸い筆者は高桑正敏氏が採集された1♂を所蔵しているもので、同氏の許可を得て報告する。

1♂, 静岡県畑薙, 5. viii. 1974, 高桑正敏採集。
なお本種は *A. spinipennis* LEWIS, (1892) ケヤキナガタマムシに似るが、上翅端の形が異なる。(横浜市磯子区, 秋山黄洋)

○果実が集まった4種のハナカミキリ

1974年8月3日, 山梨県北富士青木ヶ原の大室山附近で採集中, 赤い果実を沢山つけたクマイチゴのブッシュに近づいて見ると、多くの双翅類やルリツヤハダコメツキなど数種のコメツキ, ケンキスイなどに混じって、1頭のアカハナカミキリ♂を見た。虫は頭を下げた姿勢で口器を果実の表面につける様にして静止して居たが、大腮や小腮鬚を動かすなどの摂食を示す様な行動は特に見られなかった。更に探すと、ヨツスジハナカミキリ, オオヒメハナカミキリが同様に静止して居り、更にそのブッシュをピーティングしたところ、カラカネハナカミキリ1頭が落ちて来たが、恐らく同様に果実に来て居たものであろう。時間は午後4時頃で、2時頃から約1時間、凄まじい雷雨に見舞われて、雨が上がり、再

び陽光が射してしばらく経った時であったが、周囲の伐採あとのみこばえや灌木のしげみをビーティングしても、余り虫の姿が見られなかったことから、この1本のクマイチゴにだけ、多数の昆虫が集まっていたのは、単に雨やどりをしていた虫達でもない

と思われた。クマイチゴの実は、すでに熟れすぎて苦くなって居た。

ハナカミキリが果実集まった例は、筆者は初めて見たものであり、報告も見たことがないので、ここに記録しておく。(東京都大田区、木村欣二)

和歌山県産ナガクチキムシ科覚え書

吉 田 元 重

この科の甲虫はその名の通り、枯木や朽木で生活するため、雑木林の伐採地やシイタケのホダ木上に多く見出される。一見コメツキダマシ科の甲虫によく似るがむしろゴミムシダマシ科に近いグループで、コメツキムシ型の大型のものからハナノミ型の小型なものまである。体色もきれいなものが多い。

和歌山県でこの科にふれたものとして“和歌山県産昆虫目録”(坂口・池田:1932)があるがこれには1種のみであり、“大塔山系の自然I”(乾風、後藤、吉田:1970)には9種が記録されているにすぎない。その他紀行文中に散見するものもあるがその種数は少ない。これらはこの科の甲虫の生息するための条件として、キノコが生える程度の雑木、特にブナ科の枯木の存在が必要であることが原因であろうと私は考えている。

1950年頃より私はこのグループに興味をもち調査を続けて来たが現在まで19種の確認が出来た。一方雑木林が次第に人工の針葉樹林に変えられつつある今日、いつまでもデータを手元におくことは無意味となって来たので整理の意味を含めて発表した。採集場所は和歌山県の北より並べ、そのデータはそれぞれ初記録のみに止めた。又標本を頂いたものについては(採集者名)を記した。

Melandryidae ナガクチキムシ科

1. *Holostrophus lewisi* CSIKI ヨツボシナガクチキ 護摩壇山, 25. vii. 1952.
ブナの倒木上より得たが、護摩壇山の山系以外のブナ林では未だ見つけることが出来ない。
2. *H. orientalis* LEWIS アヤモンヒメナガクチキ 西ノ河国有林, 26. vii. 1962; 大塔村木守, 15. vii. 1951; 古座川町松根, 30. vii. 1963.
3. *Orchesia ocularis* LEWIS カバイロニセハナノミ 岩湧山, 1. vii. 1952 (後藤); 川辺町大滝川, 14. v. 1952; 西ノ河国有林, 3. viii. 1961; 大塔村木守, 14. viii. 1952.
上記2種共に植林のために雑木が伐採された枯枝をビーティングすることにより容易に得られる。
4. *O. imitans* LEWIS アカオビニセハナノミ 竜神村大熊, 22. vii. 1952; 西ノ河国有林, 26. vii. 1965; 大塔村木守, 12. viii. 1952.
5. *O. diversenotata* PIC マルモンニセハナノミ 大塔村木守, 17. vii. 1951; 古座川町大河, 29. vii. 1963.

6. *O. elegantula* LEWIS アヤモンニセハナノミ 葛城山, 25. viii. 1951; 黒蔵谷, 9. viii. 1971; 古座川町佐田, 3. v. 1964.

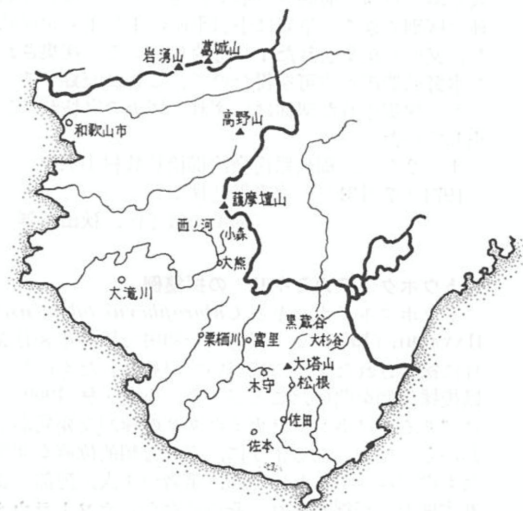
上記3種は体長と上翅の斑紋が非常によく似ているので混同するおそれがある。私は次のような区別をしている。

1. — 翅鞘の黄褐色斑が大部分をしめる。前胸背は黄褐色…………… *imitans*
— 翅鞘の黄褐色斑は黒色部より少い、前胸背は黒色…………… 2.
2. — 翅鞘後方の斑紋は横に長円型……………
…………… *diversenotata*
— 翅鞘後方の斑紋は波型…………… *elegantula*

7. *Phloetrya erotyloides* LEWIS フタオビナガクチキ 大塔村富里, 12. viii. 1965; 古座川町松根, 29. vii. 1963.

前者は朽木(種名不詳)上で得たが後者はシイタケのホダ木中で羽化間もないと思われるものを得た。このことから出現期は他に比しておそいものと考えられる。

8. *P. flavitarsis* LEWIS キオビホソナガクチキ 護摩壇山, 23. v. 1974.



和歌山県概略図

護摩壇山の奈良県よりの恐らくミズナラと思われる伐採木より得た。樹皮下である。他種に比して発生時期が早いものと思われる。

9. *P. dentatamaculata* LEWIS ハガタホソナガクチキ 大杉谷, 27. vii. 1973.
10. *P. rugicollis* MARSEUL クロホソナガクチキ 護摩壇山, 9. viii. 1959; 高野山, 8. viii. 1954 (後藤); 大塔山, 15. vii. 1951.
11. *P. fomoralis* LEWIS モモキホソナガクチキ 大杉谷, 28. v. 1972.
大杉谷尾根で倒木上で1頭を得たのみであり、少ないようである。
12. *P. bellicosa* LEWIS オオクロホソナガクチキ 護摩壇山, 7. viii. 1965.
13. *Paramikadonius crepusculus* LEWIS コメツキガタナガクチキ 護摩壇山, 2. viii. 1968.
14. *Serropalpus niponicus* LEWIS キイロホソナガクチキ 西ノ河国有林, 21. vii. 1968; 大塔村木守, 15. vii. 1951.
15. *Phryganophilus ruficollis* FABRICIUS ムネアカナガクチキ 中辺路町栗栖川, 5. v. 1956 (後藤); 大杉谷, 3. v. 1972.

5月のごく限られた期間に出現するようで下旬になると姿をみせない、アカガシなどの倒木上でみつ

かる。和歌山県産のものはすべて第5腹節が黄色であるから subsp. *rueti* HUBENTHAL とみなされる。

16. *Bonzicus hipocrita* LEWIS ボウズナガクチキ 護摩壇山, 3. vii. 1963.
六里ヶ峰で種名不詳の倒木より得たが、ブナに来るとのことである。和歌山県のブナの分布から推して生息地はごく限られていると思われるが、私の得た森林は今では伐採されてしまっている。
17. *Melandria atricolor* LEWIS クロナガクチキ 竜神村小森谷, 6. vii. 1959; 寸さみ町佐本, 13. vi. 1953 (後藤); 古座川町松根, 3. v. 1964.
山地のシイタケのホダ木や枯枝のピーティングによって得られる。
18. *M. ordinaria* LEWIS ヘリアカナガクチキ 大杉谷, 5. v. 1973 (中川 護).
19. *M. gloriosa* LEWIS アオバナガクチキ 竜神村小森谷, 25. v. 1958; 大塔村木守, 3. v. 1953; 大杉谷, 27. v. 1971.
緑色の美麗種で、日光のあたる比較的乾燥した枯木や低木の葉上で得られる。森林の周辺部に多い。
末尾ながら、いろいろと御高配を頂いた黒沢良彦先生、御協力頂いた後藤伸氏に厚く御礼申し上げる次第である。
(和歌山県由良町)

○福島県小沢平のオオツヤバネベニボタルの記録

オオツヤバネベニボタル *C. nagaii* NAKANE, 1961 は十和田産の1♂に基づき1961年に中根博士によって記載され、さらに同氏(1969年)により、奥只見産の1♀が報告されている(Fauna Japonica: Lycidae)。本種は極めて稀な種で、体長は17mm前後、日本産ベニボタルの中では最大種で、♂は前腿節が太くふくらみ、前胸背の形が特異なので一見して他種と区別できる。筆者は小沢平産の1♂1♀を所蔵し、又同日採集された1♀も検している。採集された水野弘造氏の許可を得たので、ここに記録する。なお、採集された個体はいずれもブナの立枯れに静止していた。

1♂2♀♀, 福島県南会津郡松枝岐村小沢平,
1974年7月31日, 水野弘造採集。

(横浜市磯子区, 秋山黄洋)

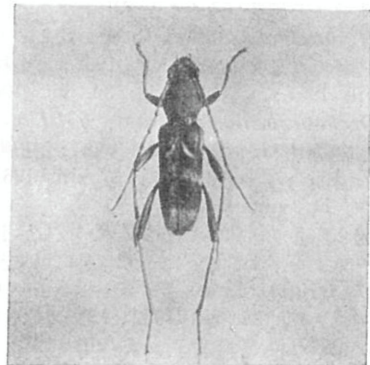
○トウホクトラカミキリ♂の採集例

トウホクトラカミキリ *Chlorophorus tohokensis* HAYASHI, (1963) は、青森県十和田で1960年8月5日に採集された1♀に基づいて記載されたものだが、以後採集例を聞いたことがなく、小島・林(1969)には“あるいはホソトラカミキリ♀の極端な変異かも知れない”とあるように、その分類的位置も明瞭なものではなかった。今回、筆者の1人、阿部により本種の♂が採集され、その特徴からホソトラカミキリとは別の独立種であろうことが明らかとなった

ので、ここに写真を添えて報告しておきたい。

1♂, 青森県北津軽郡小泊村七ツ滝, 18. viii. 1974.

本種の採集は、阿部が、1974年8月17, 18日に青森県立郷土館で行なった津軽半島西北部山塊の生物調査に参加した際に得られたものだが、採集地の七ツ滝付近は牛の放牧のために背の低い樹々の下枝は葉が食いつくされ、枯枝となったものが多く、これらをネットでピーティングした際に落ちたものと思われる。おそらくミズナラカイタヤカエデからであろう。



(五所川原市松島町, 阿部 東; 横浜市金沢区, 高桑正敏)

山形県船形山（御所山）のヒゲナカビロウドコガネ類

小林 裕 和

Serica 属（ヒゲナカビロウドコガネ）に含まれるコガネムシは種類数も多く、また分類も比較的難しいために、分布の記録に乏しいグループである。特に東北地方においては野村(1972: 桐朋学報(22): 109—144)の記録以外には、信頼のおける分布記録が見あたらない。筆者は、山形県船形山で採集されたヒゲナカビロウドコガネ類を検査する機会を得たが、その結果、山形県未記録と思われる3種を含め、7種が分布していることがわかったので、ここに記録することにする（種名後の*は山形県新記録種である）。なお、採集データは全個体下記の通りである。

山形県船形山, 30—31. vii. 1974, 窪木幹夫採集。

貴重な標本を御恵与下さった、窪木幹夫氏に厚くお礼申し上げます。

1. *Serica boops* WATERHOUSE ヒゲナカビロウドコガネ 1♂, 1♀。

2. *Serica echigiana* NAKANE et BABA エチゴビロウドコガネ* 3♂♂, 1♀。

本種は、1960年に新潟県黒川村を模式産地として記載され、その後、野村(1972年, 前出)によって新たな分布地として、青森県葛温泉および十和田の2箇所が加えられたのみで、しかもいずれも雄のみの記録であり、今日まで雌は未知であった。今回の検視個体の中には、上記の如く1雌が含まれていたため、形態的特徴を簡単に記述するとともに、雄交尾器をも図示することにした。

(雌)

頭部：黒褐色で光沢がない。眼は小さく、幅は両眼間の $\frac{1}{2}$ より狭い。頭楯は台形で、両側は直線状。前縁は、やや角ばって湾入する。

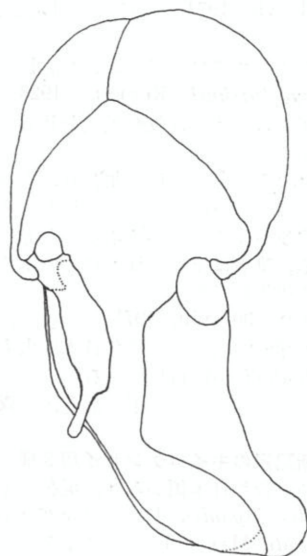
前胸背：幅は長さの約2倍、側縁はほぼ中央で最も幅広となり、やや角ばる。前縁角は前方に大きく突出するが、先端は尖らない。後縁角は雄同様、円みを帯びる。

翅鞘：暗赤褐色で、小黑紋は不明瞭。奇数間室には、数本の刺毛を有する。

脚：各腿節には光沢がある（中腿節後半部を除く）。後腿節後縁の基部 $\frac{1}{3}$ までは、腿節の幅の $\frac{1}{3}$ ~ $\frac{2}{5}$ の刺毛を粗く具える。

体長：8mm, 体幅：4mm。

本種は、外部形態が *S. boops* および *S. karafutoensis honshuensis* に似ているが、鞘翅の黒



エチゴビロウドコガネ雄交尾器

紋が不明瞭であること、鞘翅奇数間室にのみ刺毛を具えること、さらに後附節下面には、短刺毛を有さないことなどの特徴から、区別することができる。

3. *Serica foobowana* SAWADA フウボビロウドコガネ* 1♂。

4. *Serica karafutoensis honshuensis* NOMURA エゾヒゲナカビロウドコガネ亜種 1♂。

5. *Serica nipponica* (NOMURA) ヤマトヒゲナカビロウドコガネ 2♂♂, 2♀♀。

6. *Serica ovata* (NOMURA) マルヒゲナカビロウドコガネ 1♂, 2♀♀。

7. *Serica sawadai* (NOMURA) ハラグロビロウドコガネ* 1♀。

上記の如く、同一地域内において本属のコガネムシ類が多種類採集されることは比較的珍しいことであり、筆者の知る限りでは、長野県温泉で9種類を産するのが最も多い記録である（小林, 1974: New Insect, 18(3): 1—10)。しかし、このような現象はむしろ例外的であり、今回の調査で判明したように船形山から7種類の分布が確認できたことは特筆に値するものと思われる。（東京農大）

○ゴミムシ類の分布2題

1. キバナガミズギワゴミムシ北海道に産す

Armatocilleus yokohamae (BATES) キバナガミズギワゴミムシは、1883年、BATES により神奈川県川崎を原産地として記載された種である。この属のものは、すべて海生でサンゴ礁や河口に生息

し、その分布も限られている種が多い。しかし本種は、本州、四国、九州、およびフィリピンに分布し、おもに河口付近で普通に見られる。筆者の知るかぎりでは、本種の北限は、東京都荒川であった。1974年2月に筆者は、北海道野付崎の湿地を調査した際に、本種を採集することができたので報告す

る。これは、北海道初記録であり、この様な寒冷の地に、南方系の本種が分布することは、興味深いと思われる。なお、種々御教示下さった上野俊一博士に厚く御礼申し上げる。

1 ♂, 31. vii. 1974, 野付崎 (北海道, 根室支庁)。

2. ムラサキスジアシゴミムシの記録

Eobrosicus lutshniki ROUBAL, (1928) ムラサキスジアシゴミムシは、紫色の光沢を具えた美しいゴミムシである。

我が国における分布地として北海道、本州のほか長尾 (1971) により四国より記録されている。北海道には比較的多い様であるが、本州での記録は少ないと思われる。筆者は下記のように日光で本種を採集しているのを報告しておく。

1 ♂ 2 ♀♀, 30. viii. 1971, 群馬県丸沼。

なお、本種の学名として原色日本昆虫大図鑑Ⅱでは、*E. richteri* が使われている。

(東京都港区, 森田誠司)

○屋久島新記録のキイロゲンセイ類 3 種

琉球列島を含む日本領からは、現在、キイロゲンセイ *Zonitis japonica* PIC, ツマグロキゲンセイ *Z. cothurnata* MARSEUL およびオキナワキゲンセイ *Z. okinawensis* MIWA の 3 種のキイロゲンセイ属の種類が知られているが、屋久島からはそのうち 1 種の記録もない。私は、同島で燈火採集をした時に、上記 3 種の全部を採集したので記録しておく。現在、3 種を全部採集出来る地方は屋久島以外には知られていないのではないかと思う。

1. キイロゲンセイ *Z. japonica* PIC 3 頭, 愛子岳, 5. vii. 1972; 1 頭, 永田, 6. ix. 1972; 2 頭, 尾の間, 8. ix. 1972; 1 頭, 栗生, 11. vii. 1972; 16 頭, 栗生, 11. ix. 1972; 2 頭, 大川林道, 12. ix. 1972。
2. ツマグロキゲンセイ *Z. cothurnata* MARSEUL 1 頭, 永田, 15. vi. 1972。
3. オキナワキゲンセイ *Z. okinawensis* MIWA 3 頭, 永田, 14. vi. 1972; 1 頭, 永田, 5. viii. 1972。

昆虫の器具は「志賀昆虫」へ

日本ではじめてできた有頭昆虫針!!

1, 2, 3, 4, 5 号 (各号 100 本 160 円)

なお、無頭針 00 号もできました。その他、採集・標本整理用各種器具も取揃えてあります。

〒 150 東京都渋谷区渋谷 1 丁目 7-6

電話 (03) 409-6401 (ムシは一ばん)

振替 東京 21129

志賀昆虫普及社

本種は石垣島から記載された種類で、その後はっきりした記録がない。恐らく沖縄諸島や奄美諸島にも産するであろうが、今回これらの諸島を越して屋久島で発見されたのは注目しなければならないであろう。キイロゲンセイはオオハキリバチの巣に寄生するが、本種も恐らくは近似の蜂に寄生するものである。(仙台市, 渡辺 徳)

連絡・報告

◇本年の日本昆虫学会大会は岩手大学で行われましたが、その折、日頃「談話会」に出席できない地方在住の会員諸氏に御参集いただき集会を持ちました。昼休みの限られた時間のため、自己紹介を含めた一人一語で時間切れになってしまいました。会話は終始なごやかな雰囲気のうちに行われました。なお、出席者は下記の通りです。(ABC 順, 敬称略)。有田 豊, 中条道崇, 江村 薫, 林 正美, 日浦 勇, 石川良輔, 小西正泰, 窪木幹夫, 久保田政雄, 黒沢良彦, 横原 寛, 宮本正一, 宮武陸夫, 森本 桂, 中村七三, 中根猛彦, 西尾美明, 大林延夫, 大和田守, 岡島秀治, 佐々治寛之, 佐藤正孝, 沢田玄正, 白水 隆, 鈴木邦雄, 立川周二, 多田内修, 谷岸一紀, 上野俊一, 渡辺泰明。

◇甲虫ニュースは年に 4 回 (16 頁) 発行の予定でしたが、種々の事情で遅れを出し、会員の皆様に御迷惑をおかけ致しましたが、本号の発行で号数の乱れは別として従来の頁数不足はカバーすることができました。しかし来年度の印刷頁数も本年のペースを持続してゆく予定ですので会員諸氏の積極的な御投稿を御願ひ申し上げます。(世話人一同)

甲虫談話会

会費 (1 年間) 1000 円, 次号は 3 月中旬発行予定, 投稿〆切は 2 月 15 日。

発行人 黒沢良彦

発行所 甲虫談話会 東京都台東区上野公園

国立科学博物館動物研究部内

電 (364) 2311, 振替 東京 60664

タツミの昆虫採集器具

ドイツ型標本箱 木製大 ¥ 4,500, 桐合板製インロー型標本箱中 ¥ 1,400, 送料一箱につき都内及び第一地帯: 3 箇以下 ¥ 750, 4 箇以上 ¥ 650 (以下同様), 第 2 地帯 ¥ 850, ¥ 650, 第 3 地帯 ¥ 950, ¥ 750. 其他, 各種器具, 針などを製作販売しています。カタログを御請求下さい。

タツミ製作所

〒 113 東京都文京区湯島 2-21-25

電話 (03) 811-4547